



## 「天文学入門」一星・銀河とわたしたち

嶺重 慎・有本淳一 編著

岩波ジュニア新書 512, 206 頁  
定価 1,029 円 (税込み)

読み物  
お薦め度  
☆☆☆☆☆

最新の天文学の「おもしろさ」に比べ、学校で使われている理科の教科書はおもしろくない、という著者たちの憂いからこの本は生まれた。それならば天文学のおもしろさを伝えるわかりやすい本を自分たちで作ろう、というわけだ。そして、色鮮やかな写真と読みやすい解説の好著ができあがった。

第1章は祖先を家系図でさかのぼる話から説き起こしている。類人猿、ほ乳類、恐竜の時代と時間をさかのぼり、地球生命の揺籃期へと話をつなぐ。従来の天文学の入門書としては異色のスタイルだが、アストロバイオロジー（宇宙生物学）的な指向が読み取れる。

20世紀最後の数十年で天文学や惑星科学の知見は大きく広がった。続く章ではこれらの新しい発見がわかりやすい文章と豊富なカラー図版で手際よく整理・解説されている。惑星探査機やローバ（探査ロボット）によって明らかにされてきた、太陽系惑星とその衛星の多彩な活動。1995年に始まる太陽系外惑星の発見、星間雲の進化、宇宙の大規模構造など日々新しい研究成果が報告されている。そうした発見に基づき、隣接分野の知識も援用しながら生命がどのように宇宙のなかで進化してきたのか、という問いにも私たちは徐々に答えられるようになってきている。このような近況を紹介しつつ、「わたしたち生命」とのつながりで宇宙を記述する、というスタイルも本書に一貫してみられる特徴になっている。書かれている内容は、大学等で天文学を専攻した人たちにはよく知られている事柄だろう。けれども、通読して、事実や発見年代が整理された思いがしたところも少なくない。学校では教科の壁で分断されているさまざまな領域の知識が、宇宙というキーワードのもとに有機的に結びつく様子には中高生たちも新鮮な驚きを感じるのではないか。

近年の宇宙・天体研究の進展をもたらし、支えているのは観測技術と情報技術の革新である。それについては短い序章でごく簡単に触れられている。だが欲をいえば、どのようにして調べているのかはもっと知りたくなるどころだ。CCD撮像や分光装置、スーパーコンピュータなど、現代的な観測手法や計算環境の踏み込んだ紹介があれば、より研究現場の臨場感が伝わったのではないだろうか。また、本文は事実報告、情報整理に重きが置かれ、現代っ子が苦手な、事実をもとに推論し、論理的にじっくり考える記述はやや後退しているように思える。反面、だから煩雑な議論に煩わされることなく、広範な内容が読みやすく簡潔にまとまっているのだ、ともいえる。本書は教科書ではないが、教科書を意識して書かれている。もとより教科書や活字という枠組みがもつ知識伝達型の限界を感じる面もある。豊富な図版の主立ったソースは大型望遠鏡や惑星探査機であり、巨大科学の一角をなしている。鋭敏な感性の若者の中にはこのような巨大化する科学にある種の疎外感を感じる者もいるだろう。人の顔が見えにくいのだ。「入門」という言葉の語感もつ、門戸は開かれているという点との齟齬を感じるのは評者の書生論というものか。一方、著者たちは、教育や学会等の場でも、積極的に星や宇宙をテーマにした実践活動を展開している。この本は執筆活動だけにとどまらない著者たちの情熱の一貫でもある。さまざまなきっかけを通じて、天文学や惑星科学へ素朴な興味をもつ人たちはいる。幅広い最新内容をわかりやすく誠実に記述している本書を、そのような初学者に勧められる格好の「理論的」ガイドとして歓迎したい。

三浦 均（武蔵野美術大学）